

名前のない星戯曲賞

講評

中山美里

1次選考と最終選考に参加しました。正直、最終選考の当日以外はかなり苦しかったです。それは選ばれる側の気持ちができるからとかでは全くなく、演劇界の未来を勝手に考えまくっていたからです。どんな作品を選べば今後の演劇界のためになるのか。この戯曲賞が今後に残るには何ができるか。他にも色々考えました。選考基準が自由であったこと。自由だと言われているのにも関わらず代表の叶さんからは「こうしてほしいな〜」というニュアンスの文章が選考委員のグループLINEに送られてくること。考えがまとまらないままに作品を読みまくらないと選考期日になってしまう。マジでなんなんだよ！と、部屋で声を出して叫びました。隣に誰も住んでいなくて良かったです。

さて、そんな状況で私は全部を無視することにしました。演劇界の未来も含めて全部です。
(叶さん、ごめんなさい。)

私は創作者なので、創作者側の目線で作品を見てしまいます。技術ではなく好きなものを選んでほしいとのことでしたが、私は技術があるものが好きです。ここを抜きにするのなら、選考委員は私である必要がない。道端でアンケートとる方が純度の高い「好み」が拾えるのではないかな。そんな理由で「よし。無視しよう」となりました。

もちろん、明確な劇作技術なんてものはよく分かってません。でも、「ここでこのシーンに持っていくのか」「この展開は面白い」「この構成は巧みだなあ」程度の技術力を感じることはできます。そういった面白みを今回求めていました。自分にない戯曲の書き方を学びたかったのです。

結果として、集まった全ての作品を読むことはできませんでしたが、とても勉強になりました。物語をがちり作る人もいれば、演出を含んだ劇作をする人もいて、構成ではなく情景の美しさを見せてくれる作品に心が動かされることがあるんだなあと思いました。

最終選考会はとても楽しかったです。Zoomに慣れておらず、話し合う時のラグが心配でしたが、なんか空気読み合って無事に進みましたね。司会の神田さんの進行がすごかったです。これも勉強になりました。私以外の選考委員の方々が戯曲をかなり読み込んでいて、それぞれの意見が違う視点をくれました。最終選考に残った作品については十分にお話させていただいたので、ここでは細かく触れませんが、名だたる戯曲賞たちが取りこぼしてしまっている「大事なもの」が詰まった作品たちだったと思います。

何年も続いている伝統的な戯曲賞の選考基準はわかりませんが、選ばれる作品には何か芸術的な価値があるのでしょうか。そこを否定する気はありません。いつか目にももの見せてやると思っています。ですが、今回の戯曲賞のような新しい試みが増えることが、今後の日本演劇界にとって必要だと思います。単純に賞金がもらえれば公演が打てる。(規模によりけり) 作品は世の中にあればあるだけ良い。戯曲は上演された方がいい。多分。せっかく書いたん

だから。演劇だけで生活できているバブル世代の残党とも仲良くできるならしたい気持ちがある。だから公演打ちまくろうぜ、みんな。宣伝くれたら見に行くし、感想の文章とか喜んで書くし（この程度の文章力ですが）、手伝えることあったらやるよ、全然。（バイトのシフト調整があるから早めに言ってね！）

何をいっているのかわからなくなってきました。

とにかく戯曲賞という適度な緊張感の中で、戯曲についてとことん話し合えたことは私の人生において非常に贅沢な時間でした。この機会を与えてくださった全ての皆様に感謝しています。ありがとうございました。

またどこかでお会いしましょう！